

保育の質を高めていくための研修を実施します！

振り返り～ふるさと保育推進事業、保小連携推進モデル事業から…

<ふるさと保育推進事業>

平成22年度～ふるさと保育と称して「ふるさと舞鶴に愛着を持つ子どもを育むため、保育園（所）の特性をいかした特色ある保育」を各園で3か年実施してきました。ふるさと舞鶴を意識した地引網等の漁業体験や田植え、稲刈り、野菜作りなど食育と農業体験、お買い物等の商業体験、地域の特産物、伝説、伝統文化をいかした体験など、様々な体験をしてきました。

地域性を活かした大変よい体験なのですが、イベント的に終わる傾向があり、より子どもたちの記憶に残る体験とするためにも、この体験を日常の生活や遊び、活動につながる保育に発展させていく必要が、課題として見えてきました。

また、体験の中にどのような学びがあり、どのような育ちにつながっているのかを見えるようにしていくことも重要です。

<保小連携推進モデル事業>

平成23年度～保小連携推進事業においては、小学校へ子どもの育ちをつなげることの必要性から、保小の連携を進めるべくモデル事業として2か年実施してきました。

鳴門教育大学大学院教授木下光二氏を講師として迎えた講演会、連携の公開授業、小学校生活科との合同研修会等を実施してきました。連携事業を進める中で見えてきたことは、幼児期の保育・教育の重要性です。

木下先生の言葉にもあるように「幼児期の保育・教育は児童期はもとより、それ以降の教育にも密接につながっており、幼児期の保育・教育の充実が鍵になる」、「**幼児期の保育・教育の本質は遊びであり、環境との相互作用である**」こと、保育の中で夢中になって遊ぶこと、その遊びの中にどのような学びの芽生えがあるのかをとらえること、とらえたものを記録し、わかりやすく発信することが保育者に求められていることなど…多くのことを学びました。

連携をすすめていくためにも保育の質をあげていくことが必要です。

これからの
保育のキーワード

記録（可視化）
夢中になれる遊び
遊びの中の学び
つながりのある体験

平成25年度 研修事業として…

プロジェクト型保育推進事業

保育の質の向上と可視化～子ども主体の保育・自己肯定感を育む

平成24年度までに取り組んできた、それぞれの中で見えてきた課題や方向性をもとに、平成25年度は「プロジェクト型保育推進事業 保育の質の向上と可視化～子ども主体の保育・自己肯定感を育む～」として保育の質の向上を目的とした研修事業を実施し、各保育園ごとにテーマ(コース)を決めて取り組んでいきます。

実施する研修としては、

「ふるさと保育カリキュラム・記録」

◎記録について学び、子どもの育ちや保育を見えるようにする(可視化)とカリキュラムとしてのふるさと保育を学ぶ

「プロジェクト型保育」

◎子どもを主体とした遊びや生活、身近な自然から子どもの興味や関心を見つけ出し、トピックスとして取り上げ、調べたり、深めたりする、子どもと保育士の相互作用を重視したプロジェクト型保育を学ぶ

◎設定保育でもなく、自由保育でもない新しい形の保育を学ぶ

「保小連携・記録」

◎保小の連携を深めると共に、更に子どもの育ちや学びを小学校へどのようにつなげていくかを学ぶ

◎育ち学びが見える記録や振り返りについて学ぶ

※各研修ごとに大学の先生方に入っていたいただき、講義、公開保育等を通じてご指導いただきます。

この3つの研修事業の運営等については
舞鶴保育園長会に委託しています。

参加保育園

「ふるさと保育カリキュラム・記録」

指導：大方美香先生

(大阪保育総合大学大学院教授)

永福保育園

さくら保育園

相愛保育園

タンポポハウス

平保育園

なかすじ保育園

東・南・西乳児保育所

「プロジェクト型保育」

指導：北野幸子先生

(神戸大学大学院准教授)

東山保育園

ルンビニ保育園

中保育所

「保小連携・記録」

指導：木下光二先生

(鳴門教育大学大学院教授)

岡田保育園

八雲保育園

やまもも保育園

東保育所

6月1日 研修・事業説明会

平成25年6月1日(土)中総合会館コミュニティーホールにおいて、「プロジェクト型保育推進事業 保育の質の向上と可視化～子ども主体の保育・自己肯定感を育む～」と題し、平成25年度に実施される研修についての説明会を開催しました。舞鶴市内の各保育園より約160名が参加しました。また、事業の説明後『保育の質の向上をめざして:国内外の議論から学ぶ』と題して、なぜ、保育の質の向上が必要なのか、神戸大学大学院人間発達環境学研究所准教授 北野幸子氏[博士(教育学)]をお迎えし、世界や国内の状況をふまえながらお話いただきました。

保育の専門職として…保育実践研究を…北野先生の講演より

＜世界から…保育の実践研究（エビデンス）に基づく政策…＞

◎保育の重要性が注目されている。特に乳幼児期の教育・保育の質の高さが、その後の学力や育ちに影響を与えるという研究報告もある。

◎専門職としてより質の高い保育が求められている。

◎イギリス、スウェーデン、アメリカ、スイス、韓国等では、**保育の研究（エビデンス）に基づいて政策が立案**されている。**保育の実践研究を現場から発信**し、政策として保育の質を高めていく必要がある。

◎保育現場での出来事を保育士がデータとして見せていく。その第一歩が記録。

＜子育て支援から家庭との連携へ…＞

◎保育園は、家庭の代替えではなく、家庭の教育力、育児力を高めていくために家庭との連携が不可欠。

◎お客様になりがちな保育参観ではなく、保育に参加し、保護者も保育に参画していく園に。

◎子どものことば、育ちを促すための保育者の工夫、働きかけを保護者に伝える。（ドキュメンテーション）

◎家庭との連携に関する研究で明らかになったこと…子どもの活動の成果が高まる、成績が上がる。子どもの肯定的態度・意欲が形成される。子どもと家庭の規範意識が高まる。保護者の態度も変わる。

＜保育は子守りではない…

保育の専門性を！そして、専門性のある実践記録を！>

◎保育の資質（人間性、子どもへの愛・人権意識、保育への愛、共に学ぶ姿勢）を前提とし、**知識、技術、活用力・応用力・実践力などの専門性が必要**。しかし、それらは見えにくいので子守りと思われやすい。保育は子守りではないことを説明する必要がある。

◎保育の重要性をどのように家庭や社会に伝えていくか？専門職として根拠（エビデンス）に基づいた実践記録を書く必要がある。

◎科学的根拠に基づく判断をするために、「保育課程」が必要→その検討のために「実践記録」が必要→質の向上のために「評価」が必要。単なる実践記録ではなく、**評価や課題を書いたり、育ちの見通しが持てるような『専門的な実践記録』を書かなければいけない。**

＜脳科学の成果と保育＞

◎子どもの健やかな脳とからだの発達に不可欠なものとして、**0～2歳**での保育所や保育者からの安心・安定・継続的な関係性があげられている。

◎親に関心を持たれているか、持たれていないかが重要。特に1歳児には**関心を持たれている**、居場所がある、安定していることが『**学びの基礎**』となり、後の広い世界の信頼・安定した人間関係につながる。

◎4、5歳では与えられた経験よりも「**おもしろそう**」「**なんでだろう？**」「**知りたい！**」「**できるようにになりたい！**」という**気持ちが好奇心・探究心・憧れにつながる**。それを汲み取った保育者がその子たちに環境を与えることが求められる（専門性が高い保育者が必要とされる）。

◎特に注目されている事項：語彙力、聴く力、数理認識、見通し、疑問、仮説。

◎幼児の学びの特徴は、**体験や経験から得た「無自覚の学び」**であるが、**保育者は発達の見通した「自覚的な援助」**が教育の特徴であり、**子どもの学びや興味、言葉などを予測して計画しなければいけない**。そのためには、**子どもの発達の理解が必要である**。

プロジェクト型保育 スタート

中保育所 園の自然環境を生かして・・・自分たちで探して、調べて、考えて、遊ぶ

＜5月31日、中保育所にて＞

中保育所の園庭での3～5歳児の遊び（砂場遊び、色遊び、洗濯遊び）、0～2歳児の午睡からおやつ時間へかけての保育等をアドバイザーの北野幸子先生に見ていただき、指導をしていただきました。先生のコメントの中には、プロジェクトにつながる保育士のかかわりや、遊びを展開する上でのキーワードがたくさんありました。

＜園見学してのアドバイザーからの中保育所へのコメント＞

◎子ども達が自分の好きなあそびを選んで楽しんでいる様子が伺えた。子ども達の表情が良い。

◎楽しそうな遊びが設定しており、今後洗濯プロジェクト、水遊びプロジェクトなどがすすんでいきそうで楽しみ。いかに面白さを引き出せるかが、保育士の力量。

砂と水、といを使って遊ぶ⇒子どもの集中時間は10～15分。その後の展開のきっかけを保育士がつくる。遊ばされている遊びは発展しない。保育士がいっしょになって遊び、遊びを見通す力を。（いきなり砂を思いっきり掘る、水たまりをつなげる等…）



◎毎年のどろ遊びの展開（記録）からつなげて予測し、子どもの動き・発信に注目して関わるのが大切。しかし、発展のためには保育士がまずしっかり遊ぶことが必要。

◎4～5人のグループを中心に1週間交代で観察してみる。ヒントは子どもの中にある。関心があるものを比べたり、問いかけたりし、発見・成長・学びがつながるようにする。保育士からの問いかけは子どもの集中を邪魔しないように気をつける。

◎遊びの先に保育士の援助を…気づき・学び・育ちを保育士と子どもが相互的に結びつけていく中で、新たな好奇心・探究心・憧れが見えたらトピックスを深め、そこを意識して記録することが大切。記録を2～3年書くとストックになり力になる。

◎この遊びは5領域のどの領域に関係しているのか説明できるように。

見つけた草・花・虫をその場で図鑑を見て調べる⇒知りたい子が知りたい時に調べられることが重要。



探してきた草花をすり鉢や木槌を使って染めだし、色水遊びすることで力加減や水加減で異なる色の变化に気づく⇒どろ水、きれいな水も色の变化、別のところでどろ水遊びをしていたグループがいた。どろ水ときれいな水「何が違うのかな？」保育士がつぶやけば、子どもが考えだす。気づき（共通点）をつなげることで遊びがひとつにつながる。



洗濯遊び。どこに干せば乾くのか？どうして干せばよく乾くのか？⇒「日なたと日陰」「くっつけて干す、広げて干す」ことの違いに気付いている子どもの発見を他の子ども達の中に広げていく。



～北野先生コメントより～

遊びの展開～あるトピックスについて「おもしろい」「なんでだろう」「もっと知りたい」という子どもの姿を見つけ深める、調べる、考える、比べることがプロジェクトにつながる

トピックスのキーワード

自然・生活・人間関係…子どもの興味・関心から

◎子どもの遊び、発言・行動から【**実体験**】として出ているものが基本。日常より子どもの様子や言葉を丁寧に受け止め、寄り添い、子ども達の姿や状況を手がかりに、どういうことに興味を持っているか情報収集（記録）する。

◎子どもの興味から始まったものでなければ長続きせず、不自然なものとなり、意味のないものとなり、知的好奇心は育たない。

◎キーワードは自然・生活・人間関係これらが子どもの育ちに重要である。

◎保育の一場面からその後の展開や援助をどこまでイメージし、方向性を考えられるかは保育士の力量である。

◎保育士のトピックスへの関心の高さは子ども達に伝達する。

フィードバック

個人やグループの発見をクラス全体へ

◎クラスの子どもの興味・関心には個人差があり、必ずしもクラス全体が同じトピックスで活動する必要はない。遊びを通じて子ども達は、場所・季節・空間・運動・表現など多様な知能が育っている。

◎クラス全体で話し合う集会（フィードバックする場）を設け、そのトピックスについて知ってること、経験したことを発言したり、ドキュメンテーション（視覚）で伝えていくことで、共通点を認識できたり、発展に繋がる。また保育士の言葉かけで数名の子ども達の興味が、クラス全体の子ども達に伝導していくこともある。（プロジェクトアプローチの始まりとなる）

保育環境（室内）の工夫

子どもの興味・関心を大切に

◎子どもの興味や関心を大切にし、子どもの自主性・自発性・主体性を育てる環境作りをする。

◎子どもの気付きや発見を掲示したり、飼育物の図鑑や物語絵本を置くなどの工夫をする。（よもぎのにおいに気づく⇒よもぎに関する絵本をおく、においに関するコーナーなど）

◎ままごと、製作、調べる・比べる・絵本コーナーがあるとよい。

子どもが何をしていたか、何に気づいたか、何を学び考えていたか、遊びの中にある子どもの育ちを記録に

ドキュメンテーション

子ども・保護者・保育士との共有

◎ドキュメンテーションは子ども達にとって体験を共に振り返り共有できる貴重なものになり、保育士には、子ども達の中で何が育ったか、目的は達成できたかを振り返ったり、また保育士の問いかけからの相互作用の場面の振り返る機会になる。

◎保護者に子ども達の疑問や探求の様子を伝え、共有することで、保育所での活動が家庭へ繋がるようにする。また保護者用ポストイットを準備し、家庭からの情報もそこに加えてもらい、子ども・保護者・保育士が情報を共有することもよい。

◎どのような保育の領域、発達の分野にこの活動は関連しているかを、活字化し伝えていく。

専門職としての記録

事実と解釈を分けて書く

◎単なる記録（事実と印象の混在）から専門職としての記録へ

◎とらえ・読み取りの根拠はなにかを意識しながら【**事実**】と【**解釈**】を分けて書く練習が必要。そこに【**これからの宿題（課題）**】があると読みやすく、今後の保育の方向性を見出すことにもつながる。

◎視点や経験、保育的教育的意図の違いから保育士のとらえ方が違うので、ディスカッションすると、議論、評価も可能になる。

ただの見守りではなく、能動的な見守りを

＜意欲を高める、見守りとは…＞

◎【意欲】は何もないところからは生まれにくい。まず模倣（モデル）があり、自我が出たときにどう関わるか。指示か選択か、主体性を尊重した問いかけや誘いかけがあるかが大切。

◎【見守り・受容】ということがあるが、気をつけなくてはならない。見守りには、能動的と受動的の2種類ある。能動的な見守りを楽しんでほしい。

◎保育士は見通しと期待、そして関心をもって子どもをみていく。（関心をもたれていない子は力を発揮できない）

＜就学に向けて…

聞く態度を身につける＞

◎小学校の先生の求める就学前に身につけてほしいことの1位は【聞く態度】。聞く力のプロセスは、まず人間的基本的信頼感や安定感が必要。

◎大切に思われているという安心感や信頼感に支えられ、子どもは他者に言葉を伝えようとしたり、真剣に聞こうとしたりする。「聞いてもらってうれしい」「伝えられてうれしい」この経験が大事。特に幼児期は、自分の話をしっかり聞いてもらう経験を多く積むことが大切。

◎4歳児期より、1日1回、1人ずつでも、1

人で人の前で話をする経験・友達の話聞く経験をさせると良い。（集会場面）

◎保育士は、個人のアセスメントと集会場面の工夫が必要。子ども達の考えを深め、疑問を沸き起こし発見を導く質問をする。

＜公開保育を＞

◎公開保育を園内研修につなげる。批判ではなく、見比べることで互いの違いや工夫を知り、良いところ・取り入れたいところなどたくさんの気付きがあり、変化することができる。



プロジェクト型保育とは？ 保育記録とは？

6月1日の午前には、研修会を持ち、北野先生に「プロジェクト型保育・保育の記録について」お話をいただきました。日頃の子どもへのかかわりや、子どもを主体とした遊びの中にどんな学びや気付きがあるのか、その遊びをどう広げ展開していくのか、プロジェクト型保育につながるアドバイスをたくさんいただきました。

また、記録についても保護者や子どもを巻き込んだドキュメンテーションや保育の専門職としての記録を書くための具体的な方法など、ご指導いただきました。

プロジェクト型保育とは？

◎保育の課題とこれからの保育…OECDなどが指摘しているようにこれからの時代の子どもにとっては、知識・技能の習得のみではなく、知識・技能を活用する「考える力」「疑問を持つ姿勢」「自分で判断する」ことが求められている。指示命令型の保育から、子どもの主体的な遊びを中心とした保育へ。

◎与えられた経験からの学びより、自分でやりたい、やってみたい経験の方が学びが多い。

◎設定保育 vs 好きな遊びを中心とした保育
⇒どちらでもない第3の方法として…プロジェクト・アプローチ。自由な遊びから発展し、設定保育に活かすなど、組合せが可能。

◎プロジェクトとは…あるトピック（子どもの生活や自然にかかわるもの）について詳細に調べる。 関心を持つ・問いをたてる⇒五感で感じる、親しむ、ふれ合う、育てる⇒調べる、比べる、分類する、整理する⇒さらに調べる⇒表現する⇒共有する

◎プロジェクト・アプローチの目的は子どもの生活、知識・技術・社会性・情緒・道徳性・精神性を陶冶（自己教育）することである。

◎プロジェクト・アプローチのポイントは相互作用＝遊びの広がりであり、保育士には遊びを見通す力が必要。

◎インフォーマルで総合的環境、つまり、子どもが遊んでいる時に育ちや学びを引き出し、見抜いていく。子どもにつけてほしい力、学びの視点を持ちかかわる。保育士自身も遊びの経験を。

◎何を学ぶかの内容より、どのように学ぶかが重要。「できた？わかった？」聞きすぎると理解していないにもかかわらず、理解したかのように振る舞うことを促してしまう。理解できないことが恥ずかしいのではなく、「やってみよう」「知りたい」「調べてみよう」と思うことが大事。

◎プロジェクト型保育のカリキュラムは、臨機応変にどんどん変化していく、アレンジしていく『エマージェント・カリキュラム』である。

保育の記録とは？

◎「子どもとふれあう専門職は不確定な要素が多く、個別性、ライブ性が高い。」（ドナルド・ショーン）そのため振り返りや省察が重要になる。振り返りの方法として、記録は不可欠である。

<PDCAサイクルと保育の構造化>

◎P＝計画 子どもの姿（事実）から「ねらい」を決める。ねらいが達成されると子どもがどうなるのか、想定、イメージできるかが重要。ねらいに基づいて援助や環境の工夫がある。構造的に説明することが必要。「～だから～した」「～のために～する」

◎C＝評価「よかった」ではなく、何がどうだったのか？そう判断する理由は何か？もしこうしていたら…シミュレーションして実践力を高める。

◎A＝実践した後に記録を通して振り返り、活字化、言語化することで考えを自覚化することができ、評価につながる。次の実践において、選択肢、判断基準、視点が増えることで自分の中に引き出しを多く持つことができる。ドキュメンテーションにつながる、自分の実践力につながる

反省が大事。山のようにある情報から現象を顕在化し、言語化していくことが専門職としての記録につながる。

◎記録をつける意味…子どもの理解（発達過程、興味、関心）、ねらい、願い（発達の見通し、育みたい力）、実践計画（記録しながら考える）、実践の振り返り（記録しながら評価する）、自分の宿題（成長のために）、伝えるために（子ども・保護者と共有する）。

◎実践記録＝子どもの事実、事実の解釈を明確に書く。自分の単なる印象ではなく、子どもの事実に基づいて記録する。

◎記録を利用した振り返り研修の方法…写真、実践事例記録、ビデオ等を利用し、保育の環境や保育の場面を切り取りディスカッションする。（グループ単位で可能）



保小連携

～何をつくるかではなく、どうかかわれているかが重要～木下先生コメントより

廃材を使って船づくり

平成25年6月21日（金）9時～11時 東保育所の遊戯室において新舞鶴小学校1年1組（32名）と東保育所年長児みどり組（31名）が連携活動を実施しました。昨年度に引き続き、舞鶴の保幼小の連携活動をすすめていくために鳴門教育大学大学院教授 木下光二氏を講師としてお迎えし指導・助言をいただきました。

前回の時間は、初めての顔合わせ。ペアの友達と一緒にゲーム遊びをしたり、楽しく過ごしたこともあり、当日も会えるのを心待ちにしていた様子でした。ペアの友達も覚えていたようです。

今日は「船づくり」。いよいよ、2人で相談して船の土台を決めます。土台を決めたらいろいろな道具や材料を使って作り始めます。

2人で意識しながら同じような船を作る子、意識しながらもそれぞれのやり方で作る子、一人でうまくいらず手伝ってほしいけれどどうしていいかわからない子、相手の様子を見ながらさりげなく手伝っている子、さまざまな様子が伺えました。完成した船を紹介する際には、年長児からも手が挙がり、作った船を紹介したり、感想を言ったりしました。

<担任より>

◎迷いが多く、緊張してまわりが見えていなかった。

◎顔合わせ後の2回目なので楽しみにしていたが、思ったより子ども同士のかかわりが少なかったのが、残念。プールで浮かばせて試してもらおうとしたが、うまくいかなかった。

◎どんな力を育てたいか、不確定なままスタートしてしまっただけの状態。



◎木下先生の指導・助言をもとに保小連携だけではなく、日頃の保育を見直すきっかけにし、課題を整理したいと思えます。保育とは、遊びとは、子どもへの支援とは…多くのことを改めて見つめなおす機会になりました。ありがとうございました。



<木下先生のコメント>

◎連携を通じて子どもに何を育てたいか？が重要。

◎船を作るのではなく、その子がどう関わっているかが重要。活動の目的が「つくること」になってしまい、連携の目的が見えなくなってしまった。

◎いろいろと準備をするのではなく、子どもに任せる。単純にペアやグループでいっしょに船を作る、浮かべるだけでもよい。

◎いつもと違う状況で不安定な様子の子もいた。安定した1年生とペアにする、グループでの活動にするなど、いつもと違う場面でも力を発揮できるような配慮やかかわりが重要。

◎連携だからといって特別なことはしなくてよい。まずは子どもを信じて任せる。支援の必要な子どもも同様で、先に手を貸すのではなく、子どもが求めてきた時に支援することが重要。



記録の研修～園ごとに個別指導～

平成25年6月21日（金）午後からは、やまもも保育園に場所を移し、園の環境を見学し、記録の研修会を実施しました。やまもも保育園、東保育所の実際の記録を見ながらご指導いただきました。

<やまもも保育園>

◎ショベルで土を掘るなど、良い環境。室内にも緑をふんだんに使って遊ぶ環境があるとよい。室内に自然物を持ちこむ。

◎幼児期に草花に親しむこと重要。

◎雨の時期…軒下でできる遊びとして、石鹸あそび（家から小さくなったものを持ってきてもらう）→ままごと、レストランごっこ、そのために軒下にイスやテーブルをおいておくことよい。泡に花をトッピングするなど、先生がモデルとなるものを1つ置いておく。

◎リズム…昨日と今日でできるようになった所を褒める。賞賛を入れてあげると動きが変わってくる。自分で自由に表現する時間も入れてあげるとよいのでは？

◎記録…乳児の言葉の出始めを記録に書いておくことよい。手書きでもよいのでファイリングして保護者に見てもらい、

メモを添えて感想を書いてもらう。

◎「子ども達」という表記が出てくるが、実名のほうがよい。誰が何をしたのかが重要。そう意識すると子どもをよく見るようになる。

◎記録は少しの文でよい。子どもの名前の書き方は園で統一すると読みやすい。出てくる子の名前をチェックして、3ヶ月に1回は出てくるように。出てこない子は意識して書くように！感動したことを書く！

◎記録は「何をした」は重要でなく、「あそびの中で何を学んだか」を書けるとよい。慣れてくるまでは事実を書いていく。慣れてくれば、「事実」と「考察」を書き分けるとよい。

◎どんな遊びが生まれているかを写真に残しておくことよい。子どもは日々新しい遊びをつくり出している。

◎掲示物は子どもにセリフを書かせること、先生が書くより豊かになる。早期教

育ではなく、生活の中で文字とふれあうことは重要。書きたい子には書かせてあげる。自分が思った気持ちを自分で書く。

<東保育所>

◎前回より環境が改善され見えた！

◎自然環境として緑が少ないので、子どもと一緒に植物を植えるとよい。室内に季節に応じた植物をどんどん入れるとよい。自然素材で遊びを作っていくことが重要。

◎雨がふっても外へ出ているか？雨の日に水たまりでどれだけ遊べるか？誰かが来るから変わってしまうのは、本当の遊びではない。

◎1,2日で消えるのは本当の遊びではない。おもしろいから1ヶ月続いている…継続できるような遊び。遊びこめる空間になっているかが重要。

◎日々の子どもの遊びを見る中で、保育士は遊びが充実しているところには入らず、停滞しているところに入る。